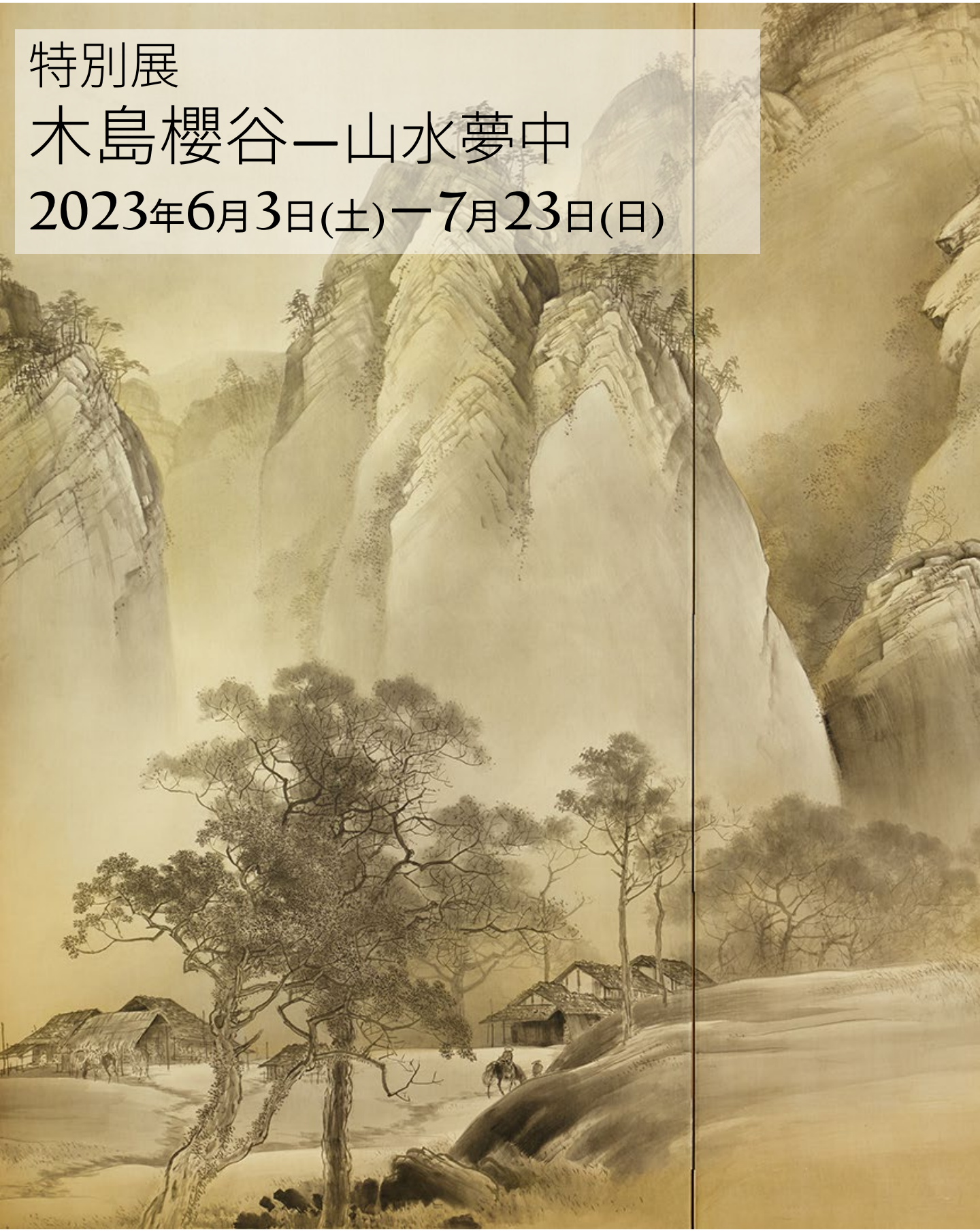
PRESS RELEASE

特別展

木島櫻谷ー山水夢中

2023年6月3日(土)ー7月23日(日)



泉屋博古館東京 SEN-OKU HAKUKOKAN MUSEUM TOKYO

《展覧会概要》

近代の京都画壇を代表する存在として近年再評価が進む日本画家木島櫻谷（このしま・おうこく 1877－1938）。動物画で名を馳せた彼ですが、生涯山水画を描き続けたことも見逃すことはできません。なによりも写生を重んじた彼は、日々大原や貴船など京都近郊に足を運び、また毎年数週間にわたる旅行で山海の景勝の写生を重ねました。その成果は、西洋画の空間感覚も取り入れた近代的で明澄な山水画を切り拓くこととなりました。

一方、幼い頃より漢詩に親しみ、また古画を愛した彼は、次第に中華文人の理想世界を日本の風景に移し替えたような、親しみやすい新感覚の山水表現に至ります。本展では屏風などの大作から日々を彩るさりげない掛物まで、櫻谷生涯の多彩な山水画をご覧いただき、確かな画技に支えられた詩情豊かな世界をご紹介します。

あわせて画家の新鮮な感動を伝える写生帖、収集し手元に置いて愛でた古典絵画や盆石も紹介し、櫻谷の根底にあり続けた心の風景を探ります。

《本展のみどころ》

●動物画だけじゃない！！　注目の画家櫻谷、山水画への誘い

代表作、幅11m超の大山水《万壑烟霧（ばんがくえんむ）》は各地の写生を醸成させた理想のパノラマ。卓越した筆裁き、西洋画的感覚もみることができます。そのほか、かつての日本の風景を踏まえたどこか懐かしくも新しい山水の初公開品も多数登場します。

●初公開の寺院障壁画！

櫻谷の知られざる山水障壁画を初公開します。34歳の櫻谷が任されたのは、明治43年に京都東山のふもとに創建された臨済宗南禅寺の塔頭である南陽院の本堂を飾る50面の襖。櫻谷の世界観が凝縮した貴重な襖絵を東京で初めて紹介します。

●写生帖一挙大公開！　～ひたむきに歩いて描いた青年櫻谷

数十冊にのぼる珠玉の写生帖では、海に山に川と旅の中で刻々と移りゆく景色を絵筆でとらえていく櫻谷の感動の軌跡を追うことができます。もちろん、高い写生技術や筆の早さも超人級。古き良き日本の風景・風俗が記録されていることも見逃せません。

●櫻谷の代表作揃い踏み・・・！

櫻谷の代表作として知られる《寒月》（展示期間：6/3-6/18）と、櫻谷芸術のエッセンスが散りばめられた《駅路之春》が一堂に！《寒月》は大正元年の第6回文展に出品され、《駅路之春》は翌年の第7回文展出品作です。この対照的な2点を初めて並べることにより、充実期における櫻谷芸術の高まりと広がりをご覧いただきます。

《展示構成》（予定）＊順路等変更になる場合がございます

1．写生に夢中―日本の海山川を描き尽くす

櫻谷が20代から30代にかけて頻繁に出かけた写生旅行。飛騨、富士、若狭、大分 … 旅先の写生帖からは山川海野の風景、木・岩・水から民家や民具、働く人々の営みまで、移動しながら心惹かれる対象を次々と写し取る様子がうかがえます。

彼の新鮮な感動そのものを封じ込めた珠玉の帖冊は、作品にも匹敵する迫力と完成度で、観る者に迫ってきます。

《兵庫・明石写生》写生帖より　　明治38年（櫻谷文庫）

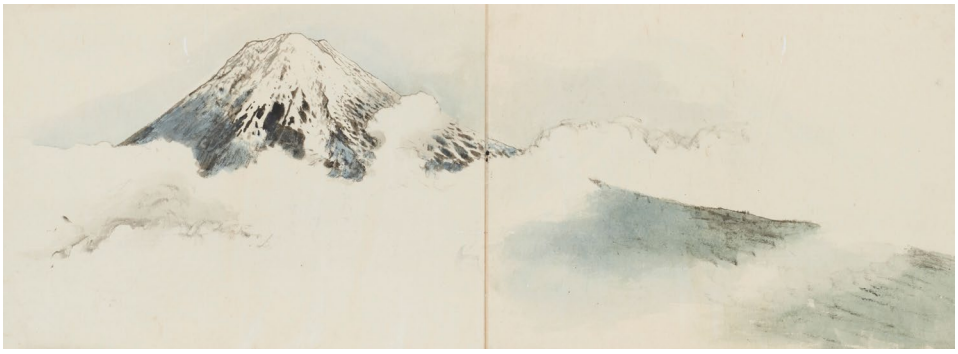
《山梨・古関写生》写生帖より　　明治41年（櫻谷文庫）

《福井・浦見川写生》写生帖より　　明治38年（櫻谷文庫）

《京都・加茂川写生》写生帖より　　明治36年（櫻谷文庫）

高い写生技術は、京都画壇の重鎮・今尾景年（1845－1924）に学んだもの。さらに明治30年代後半、年を追ってその技術は劇的に向上していきます。晩年を京都で過ごした明治洋画の父、浅井忠（1856－1907）の影響も考えられます。

《岐阜・飛騨　写生中の画友》写生帖より　明治39年（櫻谷文庫）

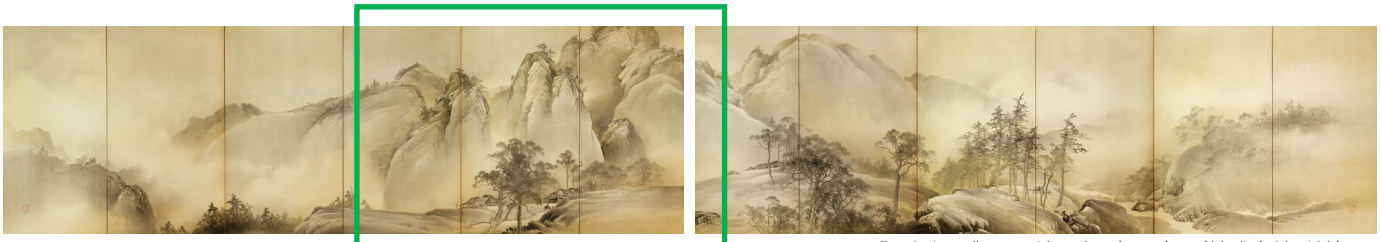


《富士山写生》写生帖より
明治41年（櫻谷文庫）

写生帖の数々は、120年ほどの時を経て、一部劣化が進んでいましたが、本年、住友財団の助成により修理が進んでいます。これまでばらばらになっていた大画面の写生も展観する予定です。櫻谷が夢中で写し取った古き良き日本の風景が蘇ります。

2．写生から山水画へ　－－光と風の水墨

櫻谷は20代から写生をふまえた景観表現を作品に取り入れていきます。一見して伝統的な水墨山水とみえて、山や川、樹や岩、建物や人物などモティーフに実在感が加わり、また光と影の表現が見られるようになります。ただし、写生はすぐに作品となるのではありません。彼にとって写生とは、徹底して向き合ってその本質をつかみ取るための行為。それを自身のなかで醸成させ、やがて立ち上ってくる姿を作品として描き出すのだといいます。それを積み重ねた櫻谷山水画の集大成といえるのが明治43年に制作したふたつの大作。幅11mの大屏風《万壑烟霧（ばんがくえんむ）》（株式会社　千總）と、南禅寺塔頭の南陽院本堂５室にわたる障壁画。そこでは日本人にとって、どこかでみたような風景が要所にみえながら、全体的にはどこにも存在しない、櫻谷の想像上の空間なのです。



《万壑烟霧》　明治43年（1910）（株式会社千總）

《大分・耶馬溪写生》写生帖より
明治42年（櫻谷文庫）

《南陽院本堂障壁画》　明治43年（1910）　京都・南陽院
【展示期間：前後期で入替あり】

櫻谷山水画の代表作は、制作の3年前から折々に訪れた飛騨、大分耶馬溪、甲府昇仙峡の山岳にかかる白雲に感銘をうけ取り組んだもの。各地の写生が活かされています。

しかし屏風を一望すれば、崇高きわまりない絶界のパノラマがひろがります。

おなじみの富嶽図も写生に基づいています。さらに遠くに重なる山並みの表現などには西洋絵画的な遠近表現の影響がうかがえます。こういった点には、明治30年代後半に教えを乞うた洋画家・浅井忠の影響が感じられます。

《富士図屏風》　明治（個人蔵）　（展示期間：6/3-6/25）

バルビゾン派を思わせる森林の遠景

3．写生の深化　——色彩の時代

写生を経て櫻谷のなかで醸成された景色は、やがて末節をそぎ落とし、本質を抽出したようなシンプルな表現にいたります。それは写実的表現と抽象化されたフォルムが溶け合う不思議な世界で、櫻谷の自然観照がより深い地点で結実したこれまでにない領域といえるでしょう。そこに欠かせなかったのが濃厚な色彩。岩絵具の強い発色、ざらついた質感や厚みを利用した色面は、身近でありふれた日本の景観を時に晴れやかに、時に重厚に形づくり、この世のものとは思えない至高の眺めへと塗りかえていきました。

《寒月》大正元年（1912）（京都市美術館）（展示期間：6/3-6/18）

櫻谷の代表作は、月夜の鞍馬で残雪にのこされた獣の足跡をみた経験から生まれます。そこから「飢えた孤独な狐」のイメージが立ち上ったと。その世界を具現するため、写生を重ね構想を深めたといいます。

一見水墨画のように見えますが、雪には白の胡粉、虚空はシルバーグレーの絵具、竹には群青や緑青など、重厚に輝く顔料で、この冴えわたる雪月夜を鮮やかに描き出します。

《寒月》（部分）

《京都・貴船写生》（写生帖より）　明治39年（櫻谷文庫）

《寒月》制作の大きなインスピレーション
となった貴船の写生

《駅路之春》　大正2年（1913）（福田美術館）

《暮雲》大正7年（1918）（大阪歴史博物館）　（展示期間：6/27-7/23）

4．画三昧へ ――理想郷を求めて

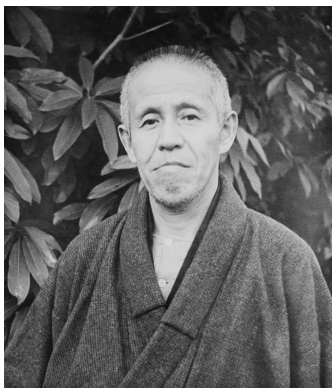
櫻谷は50歳前後から公職をひき、衣笠の自邸で文人的な暮らしを実践するようになります。絵画制作のかたわらで、かつて写生先で詠じた漢詩を書幅に揮毫したり、古書画や古典籍を収集し折々に眺めたり。そのなかで、57歳で制作した最後の帝展出品作は、高さ2mを超える山水画の大作でした。青年期の写生に由来する実在感を継承しつつも、全体の構想はより大きなスケールとなっています。それは古来文人が重視した筆墨、すなわち墨線そのものの魅力を追求するものでもありました。

《峡中の秋》昭和8年（1933）（櫻谷文庫）

櫻谷が数え切れないほどの作品制作を重ね、晩年にたどりついたのは、青年期に訪れた各地の風光と、詩書画を通じて交わった先人たちの理想世界とが渾然一体となった世界でした。その世界に心遊ばせ、なにものにもとらわれることなく絵筆をとる日々、画三昧の境地がそこにはありました。

《峡中の秋》大下絵
（櫻谷文庫）

《画三昧》昭和6年（1931）（櫻谷文庫）



木島櫻谷

（このしまおうこく1877－1938）

明治後半から昭和前期まで、文展帝展で活躍した京都日本画壇の代表的存在。徹底した写生を基礎に、卓越した技術と独自の感性により生み出された叙情的で気品ある画風で、近年再評価の気運が高まっている。京都の伝統を継承しながら、西洋画の要素をも取り入れた、近代的で洗練されたスタイルは時代・国を超えて支持されている。とりわけ親しみやすい動物画で知られるが、生涯描き続きた山水画も秀逸。

《ラーニング・プログラム》 各プログラムの詳細、お申込みについては当館ウェブサイトをご覧ください。

①記念講演会「《駅路之春》について―作品完成までの軌跡（仮）」（要事前申込・要観覧券）

日時：6月3日（土）14：00～15：00

講師：阿部亜紀氏（（一財）福田美術振興財団学芸員）

②講演会「木島櫻谷の生涯と山水画」　（要事前申込・要観覧券）

日時：6月25日（日）14：00～15：30

講師：実方葉子（泉屋博古館学芸部長）

③シンポジウム「櫻谷山水画のレシピ」　（要事前申込・要観覧券）

日時：7月8日（土）14：00～16：30

基調講演：実方葉子（泉屋博古館学芸部長）

登壇者：竹浪遠氏（京都市立芸術大学准教授）、森光彦氏（京都市京セラ美術館学芸員）

野地耕一郎（泉屋博古館東京館長）

モデレーター：椎野晃史（泉屋博古館東京学芸員）

④〈アートwith〉レクチャー「美術雑誌の仕事」　（要事前申込・要観覧券・要参加費）

日時：7月14日（金）17：30～18：30

講師：柳田康弘氏（一枚の繪　編集者）聴講料：500円

⑤オウコク・トーク　（要観覧券・当日11時より整理券配布）

6月17日・7月15日（土）14：00～15：00　椎野晃史（泉屋博古館東京学芸員）

《基本情報》

展覧会名　特別展　木島櫻谷　―山水夢中

Konoshima Okoku - Lost in Sansui Painting

会　　期　2023年6月3日(土)～7月23日(日)

開館時間　11:00～18:00　※金曜日は19:00まで開館　※入館は閉館の30分前まで

休 館 日　月曜日 ＊7/17（月・祝）は開館、翌7/18（火）休館

入 館 料　一般1,200円(1,000円)、高大生800円(700円)、中学生以下無料

※20名様以上の団体は()内の割引料金

※障がい者手帳ご呈示の方はご本人および同伴者１名まで無料

会　　場　泉屋博古館東京〒106-0032東京都港区六本木1-5-1

https://sen-oku.or.jp/tokyo/

TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル)

主　　催　公益財団法人泉屋博古館、公益財団法人櫻谷文庫、BSフジ、ライブエグザム

《お問い合わせ先》

泉屋博古館東京　広報担当：橋本旦子　展覧会担当：椎野晃史(泉屋博古館東京 学芸員)

TEL: 03-3584-8136　FAX: 03-3584-8137

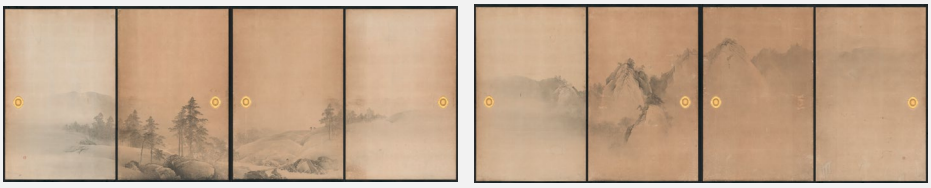
E-mail : pr-tokyo@sen-oku.or.jp

《貸出可能画像・キャプション一覧》

《万壑烟霧》ばんがくえんむ
明治43年（1910）
株式会社 千總
【展示期間：通期】

《寒月》かんげつ
大正元年（1912）
京都市美術館
【展示期間：6/3〜6/18】

《駅路之春》うまやじのはる
大正2年（1913）
福田美術館
【展示期間：通期】



《南陽院本堂障壁画》
なんよういんほんどう　しょうへきが
明治43年（1910）
京都・南陽院
【展示期間：前後期で入れ替えあり】

写生帖《海濤集四》
若狭美浜
明治38年（1905）櫻谷文庫
【展示期間：通期（頁替あり）】

写生帖《芙蓉集一》富士
明治41年（1908）
櫻谷文庫
【展示期間：通期（頁替あり）】

《峡中の秋》
きょうちゅうのあき
昭和8年（1933）
櫻谷文庫
【展示期間：通期】

《泊船》とまりぶね
大正4年（1915）
個人蔵
【展示期間：通期】

《お問い合わせ先》
泉屋博古館東京　広報担当：橋本旦子　展覧会担当：椎野晃史(泉屋博古館東京 学芸員)
TEL: 03-3584-8136　FAX: 03-3584-8137
E-mail : pr-tokyo@sen-oku.or.jp